

一九七七年以前出土の木簡（六）

奈良・平城宮跡（第三二次）

- 1 所在地 奈良市佐紀町・二条大路南二丁目（旧北新町）
- 2 調査期間 一九六五年（昭40）一二月～一九六六年（昭41）四月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 樋本亀治郎
- 5 遺跡の種類 宮殿・都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

兩側溝（北側溝は宮南面外堀にある）をはじめとして、宮内から宮南面外堀への排水のための南北溝、東一坊大路兩側溝を渡るため二条大路に架かっていた橋、その一部が調査区に含まれる左京三条一坊十六坪・二坊一坪内の掘立柱建物四棟、柵、井戸などである。

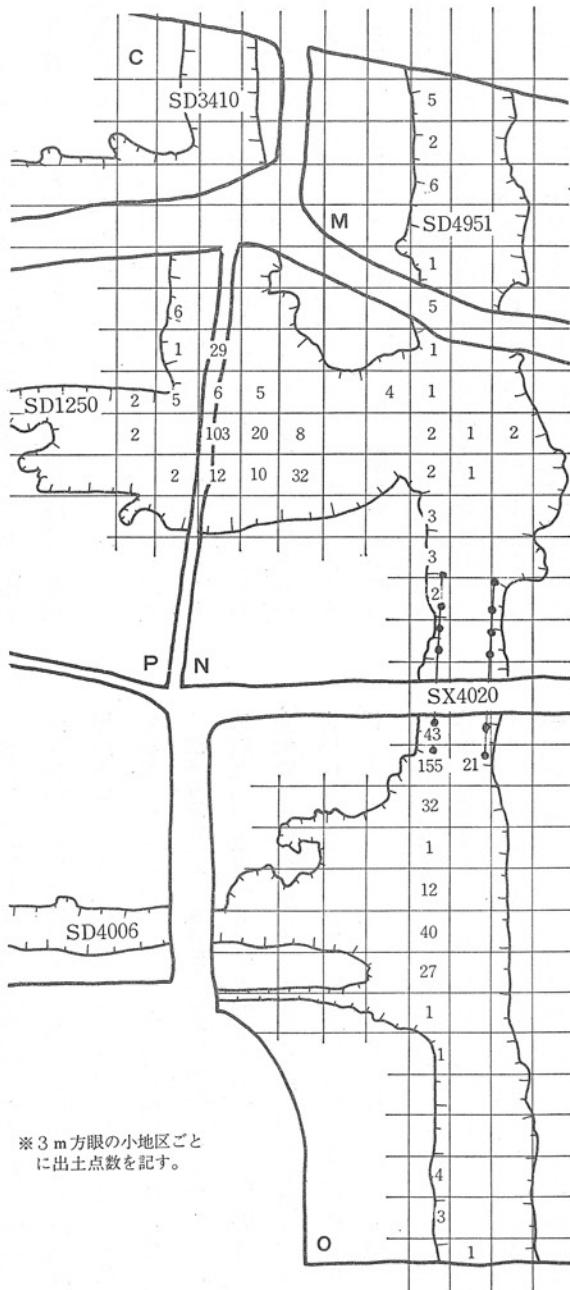
木簡の当該調査区出土点数は六三九点であるが、木簡出土遺構（すべて溝）との関係は次のとおりである。

当地区出土木簡の過半三八二点は、宮東面外堀で東一坊大路西側溝にあたるSD四九五一から発見された。その他、宮南面外堀で二条大路北側溝にあたるSD一二五〇に宮内から南流するSD三四一〇が合流する付近から二四三点と集中している。SD一二五〇では調査区西端で一点出土をみた。また、二条大路南側溝SD三九〇五と東一坊大路東側溝SD三九一一は、ともに調査区東辺部で検出した素掘り溝であるが、SD三九〇五から一点、SD三九一一から一二点の木簡が発見されている。

以下、木簡出土遺構の概要を述べることにしたい。

調査で検出された主要な遺構は、東一坊大路路面敷とその東・西兩側溝（西側溝は宮東面外堀にあたる）、二条大路路面敷とその南・北

溝SD四九五一 平城宮東面外堀かつ東一坊大路西側溝にあたる



第32次調査区木筒出土状況図

南北溝である。素掘りで溝幅は一定しないが、最大幅で10m、最小幅で4・8mを測り、深さは1・2m前後である。溝堆積土は、上層から暗灰色土、粘土混細砂、粗砂の三層に分けられる。木筒は溝全域から出土したが、とくにSD四九五一をまたいで二条大路に架かっている橋SX四〇二〇の橋脚付近から二〇九点、またSD四

九五一に二条大路南側溝SD四〇〇六が注ぎ込む付近から一一四点集中して発見された。橋SX四〇二〇は、橋幅一三・四m、長さ三・八mで、橋杭七本の橋台二基からなり、三回の改修がみられる。なお付近より瓦製擬宝珠が出土している。SD四九五一の流れは、SX四〇二〇付近で水が淀んだためであろうか、溝側壁に有機物が

堆積層をなしており、木簡はその堆積層に多く含まれていた。出土層位は、粘土混細砂、粗砂層の二層からあるが、両層は近い時期の堆積で時期的区別はできない。

なおSD四九五一には、SD一二五〇、SD四〇〇六、SD三九五六（SD四〇〇六の南六mを平行する東西溝）の三条の溝が流入するが、SD四〇〇六、SD三九五六の両溝からは木簡出土をみないので、SD四九五一出土木簡は、SD四九五一の上流、およびSD一二五〇とそれに注ぎ込むSD三四一〇から流れ込んだものであろう。溝SD一二五〇・SD三四一〇・SD一二五〇は宮南面外堀かつ二条大路北側溝にあたり、東流してSD四九五一に流入する。またSD三四一〇は宮東面大垣の内側を南流する排水溝で、上流は第二二次南調査（6AAE・AF区）、第二九次調査（6AAG・AH区）（ともに『木簡研究四』参照）や、本号にその概要を収録する最近の第一五四次調査（6AAD区）でも検出され、いすれも木簡出土をみており、その下流は当該調査区でSD一二五〇に合流している。SD三四一〇が南面大垣を通過する部分については、大垣の痕跡が東端では崩壊した状況で途切れているため、いかなる形態であったかは明らかでない。なおSD三四一〇には、第三二次補足の発掘調査で検出された南面大垣の北雨落溝SD四一〇も西から流入しているが、その雨落溝からは削屑が多く占めるとはいえ、考課関係の木簡など、一三〇〇〇余点もの木簡出土をみている。

SD三四一〇がSD一二五〇へ合流する付近から、SD一二五〇がSD四九五一に注ぎ込む間の堆積土は、SD四九五一と同様に上層から暗灰色土、細砂、粗砂層の三層からなり、木簡は下層二層から発見されているが、これまた時期的区別はできない。

調査区東辺部で検出した南北溝SD三九一一・SD三九〇五D三九一一は東一坊大路東側溝にあたり、東西溝SD三九〇五は二条大路南側溝にあたる。両溝とも新旧二時期あり、各々が接続する。古い時期の溝SD三九一一Aは二条大路を横断するが（その横断部に橋SX三九二〇が架かる）、それにSD三九〇五AがT字状に合流しており、また新しい方の溝SD三九一一BとSD三九〇五BとはL字状に接続する。木簡はSD三九一一Bから一二点、SD三九〇五Bから一点が、いすれも接続部近辺で出土している。なおSD三九一一Bは幅一・三m、深さ八〇cm、堆積土は四層に分れ、SD三九〇五Bは幅一・六m、深さ八〇cmで、堆積土は三層に分れ、ともに素掘りの溝である。

8 木簡の釈文と内容

SD三四一〇が、SD一二五〇へ流入し、さらにその流れがSD四九五一へ流れ込む。従ってSD四九五一出土木簡には、SD三四一〇→SD一二五〇→SD四九五一の流れのものと、SD四九五一のものとの上流からのものとがある。またSD四九五一と、SD三四一〇とSD一二五〇の合流点の堆積土はともに同じ層序で木簡出

1977年以前出土の木簡

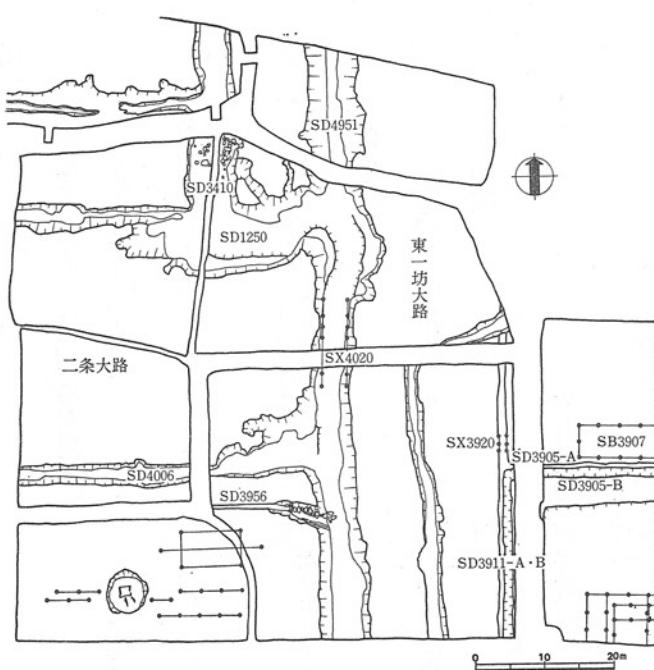
土層位も同一であり、基本的には共通のものと考えられる。

ところで、SD三四一〇・SD一二五〇合流点付近と、SD四九五一出土木簡の年代については、SD三四一〇・SD一二五〇合流点付近からは、宝龜五年紀伊國調塩荷札²⁵⁾、宝龜六年文書²⁶⁾、「近衛」府とある木簡²⁷⁾など、またSD四九五一からは、宝龜五年信濃国衛士養物荷札¹⁴⁾がみられるなど、年紀のある木簡は、宝龜年間に限られる。なおSD四九五一からは、和同開珎・長年大宝、寛平大宝などの錢貨や、一〇世紀を降らない唾壺などの土器の出土をみ、またSD三四一〇・SD一二五〇合流点からは、和同開珎、神功開宝、隆平永宝、富寿神宝などの錢貨が出土しているところから、これらの中は平安時代前期まで存続していたことがわかるが、木簡については年紀が宝龜に限られることからみて奈良時代末期までのものと考えられている。しかし、ときどきの溝浚渫にもさらい残されたと思われる郡・里表記の庸米荷札²⁸⁾など時代的に遡るものも少数みられる。

SD四九五一出土木簡で注目されるのは、「春宮」³⁾や春宮坊被管の官司（主漿署）⁽¹⁾⁽²⁾名がみられることがある。またSD三四一〇・SD一二五〇合流点からも「主工署」²⁹⁾とある木簡がみられることからも、SD四九五一、SD三四一〇の上流地域に春宮坊所在の可能性が考えられている。墨書土器にも「主工」とあるものがみられる。春宮坊とその被管は常置でなく、皇太子のいる時期のみ設

置されたが、奈良時代後期で該当する皇太子は、他戸、山部、早良親王で、そのいずれかの春宮坊であろうとされる。

またSD四九五一からは、利木・楳の請求文書⁷⁾、柵や歩板などの語句がみえる文書断片⁽⁹⁾などがみられ、これらは溝上流で行われた奈良時代末期の造営を示すものである。



第32次調査区木簡出土遺構図

SD11四10・SD11五0合流点からは、近衛府など衛府関係の木簡がみられる。近衛府將監紀船守をさすと思われる「將監紀朝臣曹司」の木簡¹⁰や近衛の歴名²⁴がそれにあたる。その他、衛府関係として、「衛門府」の断片¹⁸や、衛士・火頭の歴名¹⁹、「大尉」とある断片¹⁸などがある。鹿安の付札²⁰も六衛府が祝奠祭の三牲として進める鹿肉の付札であろう。

これら各溝出土木簡は削屑なども多いが、概して付札に比して文書木簡が多いといえよう。

溝SD四九五

- (1) 「主漿署 宿侍舍人三人 未選水宿称宮繼」
- (2) 「主漿署 〔請カ〕」
- ・「廿七屯人別九屯 十月十一日水宮繼」
319×(25)×5 081 1111五九号
- (3) 「〔請カ〕」
- ・「□所所請如件
- ・「蘿春宮 」
- ・「須々保利 」
- (154)×17×5 081 1111六一号

(4)

・
□

□松成舎人從八位上額田部嶋國」

十月廿三日□□息主

(145)×29×2 019
1111六一号

(5) ×宿侍四十人春□×

091 1111六一号

(6) 「拔柱九枝 見役十一人〔少田カ〕 未到若麻續□□土師益人 以上□□ 〔暇カ〕 左衛士白猪乙麻呂

『訓訓訓

訓訓訓川川 川 川 川 川 淨川淨川川

訓訓

淨
(別筆重ネ書キ)

六月廿三日廣井常石

『川川高 高淨 戸淨 殿淨 川淨川川 〔淨カ〕
川淨淨高 戸淨 殿淨 川淨淨 〔淨カ〕
川淨淨川川 川淨淨 〔淨カ〕 川淨淨 〔淨カ〕

310×36×6 011 1111六四号

(別筆重ネ書キ)

(7)

・「〔利カ〕」
・「請□木一枝 楠一束 上件等物□□□□□也〔惠カ〕」
・「〔利カ〕」
298×(16)×6 011 1111六五号

1977年以前出土の木簡

「▽鹿出在五藏」

51×18×5 032 三五六五号

・「紀伊國日高郡調塙三斗

(141)×11×3 019 三五六〇号

(21) (22) (23)

・秦公麻呂

實龜五年

(141)×11×3 019 三五六〇号

『 □ □ 呂カ □ 内臣之 □ 土カ 師カ 』 (別筆重ネ書キ)

「訴苦在牟逃天畫カ夜壹時牟不怠而大尔念訴×

實龜六年八月五日番長吉志×

『大大大大大大』

『雲家守呂カ 呂カ 嶋宿守

申然而已身者今間天地乃慈悲乎

(196)×(68)×10 081 三五六九号

『 □ 師カ □ 師カ 』 (別筆重ネ書キ)

『 □ 』 (188)×(28)×3 081 三五六九号

溝26 1 1150

(24) (25)

「田村家□人等□食合四升

・「▽邑久郡尾沼鄉□部宮」

(26) (27)

許曾倍カ
井眞万呂

261×25×4 011
三五六四号

・「▽調塙三斗」

152×20×9 032 三五六九四号

(墨縁)

阿倍枚万呂八

丸部駿河万呂一升一

(墨縁)

口カ 野カ

八

諸カ
秦已知万呂八

津カ 繼カ
眞八

□乃秋 一升二

(墨縁)

口カ 野カ

八

更カ
□占眞立八

山口乙万呂一升二

上毛野力八

(墨縁)

口カ 野カ

八

『長』

近衛

山口廣瀬八

『長』

額田乙勝八

水取繼成八

『長』

茨田弥繼八

茨田弥繼八

『長』

(334)×(68)×2 019 三五〇八号

奈良国立文化財研究所『平城宮第27・32次発掘調査概報』（一九六六年）

横田拓実「昭和40年度平城宮出土の木簡」（『奈良国立文化財研究所年報一九六六』一九六六年）

石井則孝・三輪嘉六「昭和40年度平城宮発掘調査概報」（同右）

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』四（一九六七年）

同『平城宮木簡』三（一九八一年）

（綾村 宏）

		木簡学会役員			
幹事	監事	会長	副会長	委員	委員
和田	東野	岸 俊男	大庭 優	青木 和夫	岩本 次郎
萃	佐藤	門脇 稔二	佐藤 宗諱	坪井 清足	狩野 久
治之	綾村	原 秀三郎	宗諱	直木孝次郎	田中 次郎
		関 晃	坪井 清足	田中 琢	田中 邦雄
		佐藤 信	直木孝次郎	直木孝次郎	岡崎 敬
		宏	田中 琢	田中 琢	鬼頭 清明
		義則	早川 庄八	早川 庄八	岡崎 敬
		橋本	土田 直鎮	土田 直鎮	鬼頭 清明
		加藤	寺崎 保広	寺崎 保広	岡崎 敬
		館野	榮原 永遠男	榮原 永遠男	
		和己			
		町田			
		章			